

週刊 ヤマケイ



2018/05/24



連載 登山者のブックシェルフ

フリークライミングのはじまりを知る一冊

連載第 17 回(著者＝木元康晴／登山ガイド)



『我々はいかに「石」にかじりついてきたか』の下に敷きつめてあるのが、『クライミングジャーナル』のバックナンバー。フリーだけでなくアルパインの記事も多く、充実した内容でした

『クライミングジャーナル』編集長の著書

私が登山やクライミングに取り組み始めた頃に、発売日を心待ちにしていた雑誌があります。それは白山書房から出ていた、今はなき『クライミングジャーナル』でした。

写真を大きく扱った、見て楽しめる誌面だったことに加え、ルート紹介の記事が豊富で、登ってみようと触発されることが多かったからです。1991年5月に休刊となったときには、寂しい思いがしたものでした。

その『クライミングジャーナル』の編集長だったのが、菊地敏之。1982年1月に、当時登ることは不可能ではないかといわれていた、谷川岳一ノ倉沢の烏帽子沢奥壁大氷柱を初登した、実力派クライマーでもある人です。

菊地氏は編集長ながら、誌上に数多くの記事を書いていました。いずれも主張が明確で、読んで納得するものばかり。その中でも私が特に楽しみにしていたのが「実践アルパイン・クライミングテクニック」という連載記事でした。豊富な実体験を取り混ぜた実用的な技術解説であり、ここに書かれていることを頭に叩き込んで、せっせと岩場に向かったものです。

そういったわかりやすさに定評があるからでしょう、菊地氏の著書は技術解説書が多いのですが、2004年には傾向の違う本を出版。それは『我々はいかに「石」にかじりついてきたか ――日本フリークライミング小史――』というもので、菊地氏が谷川岳など山岳地帯の岩壁でのロッククライミング（いわゆるアルパインクライミング）とは別に力を注いできた、フリークライミングについて記した本です。

今は各地にクライミングジムも多く、とてもポピュラーになったフリークライミングですが、国内で行われるようになったのは比較的歴史が浅く、40年ほど前のこと。菊地氏は手探りで始まったその時期からフリークライミングに取り組んでいて、この本ではその流れを伝えています。



<参考写真>国内でのフリークライミング発祥の場の一つとされる、鷹取山の岩場。登っているのは「コの字」と呼ばれるボルダーエリア。

カオスでアナーキーだった時代

この本でまず驚いたのは、「有史以前のボルダリング」という章に記される、1970年台の三浦半島・鷹取山の岩場の様子です。鷹取山は古くからアルパインクライミングの練習場ではあったのですが、それとは異なる、現在と同様のボルダリング（あまり高くない岩場でのロープを使わないフリークライミング）が、その頃から自然発生的に行われるようになっていたとのこと。フリークライミングの概念がない時代に、単に難しい壁面を登るという行為に魅力を感じる人たちが、すでに存在したというのは興味深いことでした。

その後 1980 年台に入り、アメリカのヨセミテの動向が国内にも伝わってきて、菊地氏をはじめとするクライマーたちも本格的にフリークライミングに取り組むことになりました。

ただし、実際に取り組んでみるとわかるのですが、フリークライミングでレベルアップするのはなかなか困難なこと。普通の趣味のように、月に 2~3 回やる程度では、上達はあり得ません。したがってどのクライマーも、ろくに定職に就かずに、ひたすらクライミングに打ち込むこととなります。

けれども当時の多くの一般人は、フリークライミングなんて野蛮で危険なだけの行為と思っていたに違いありません。クライマーたちはある意味社会に背を向けるようにして、レベルアップを目指し突き進んでいったのです。そしてフリークライミングそのものも、まだまだ発展途上。次々と新しいスタイルが試みられ、混沌とした状況が続きます。

この本は、そうやって次第に形作られていくフリークライミングの世界と、試行錯誤を繰り返すクライマーたちの姿が書き綴られた、貴重な一冊です。とは言ってもけっして堅苦しさはなく、菊地氏ならではの毒のあるユーモアあふれる文章は楽しくて、読んでいるとつい笑いがこみ上げてきます。

今やフリークライミングは、2020 東京オリンピックに「スポーツクライミング」として正式採用されるほど、成熟しました。公益社団法人日本山岳・スポーツクライミング協会のウェブサイトで見ると、強化選手の面々は、正にスポーツ選手を思わせる爽やかな健全さ。

しかしひと昔前の、非常にワイルドだったフリークライミング本来の姿を知ることによって、より深くこのスポーツの魅力を知ることができるでしょう。これからフリークライミングに取り組んだり、競技を観戦しようとする人には、ぜひ一度読んでみてほしい一冊です。

今回紹介した本(リンクは amazon)

『我々はいかに「石」にかじりついてきたか』

<https://www.amazon.co.jp/dp/480830810X/> (紙版)

<https://www.amazon.co.jp/dp/B009SXDFV6/> (電子書籍版)

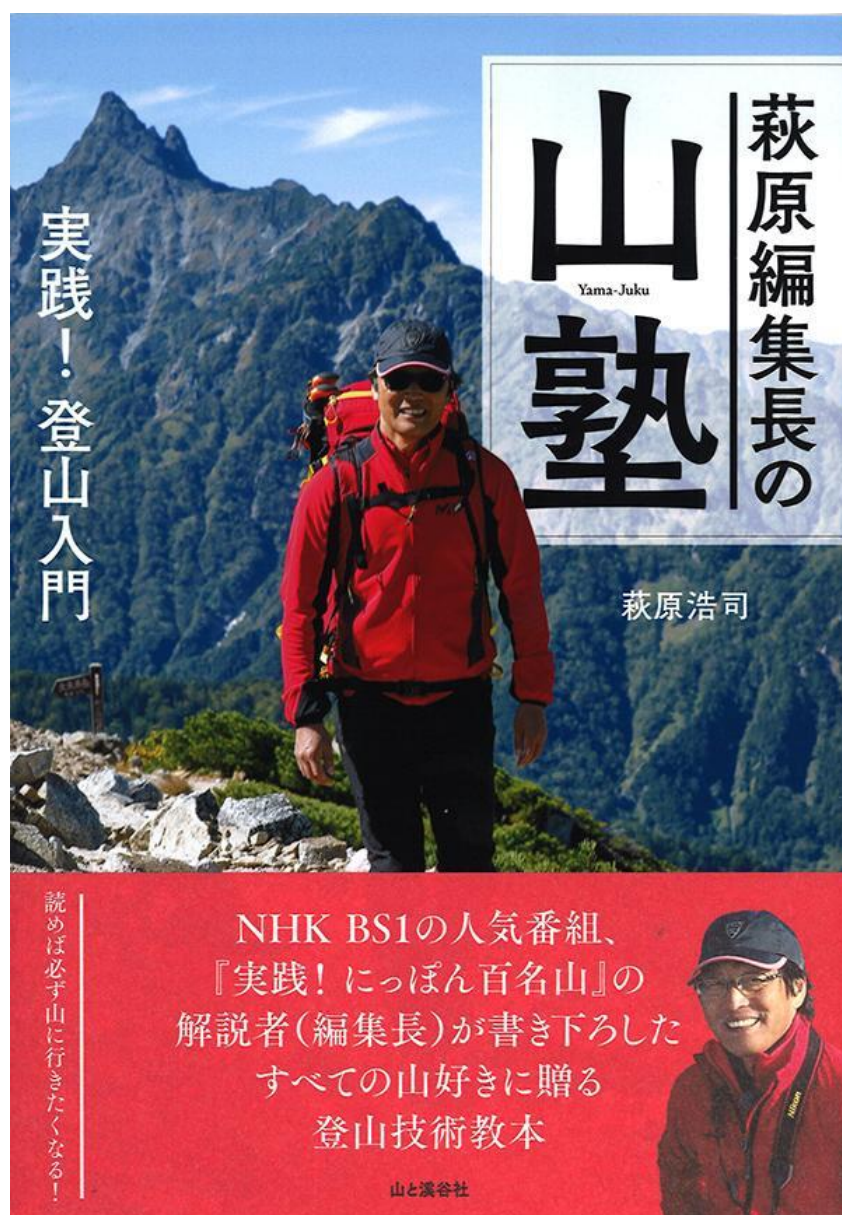
著者ブログ

山と兎

<http://yamatusagi.blogspot.jp/>

『萩原編集長の山塾』

NHK-BS1 人気番組出演の著者が解説



『萩原編集長の山塾』萩原浩司＝著／5月30日発売／1600円＋税／A5判／192ページ／ISBN:
978-4-635-150330

2013年から5年にわたってNHK-BS1の『実践！ につぼん百名山』に出演して、釈由美子さんや工藤夕貴さんとともに山の素晴らしさを伝えてきた著者が、番組で伝えてきたことを一冊にまとめました。

山行計画、登山用具、歩行技術、生活技術、危機管理、山の楽しみ、そしてガイド。一読して感じるのは「豊富な写真」とそこからくる「わかりやすさ」です。

通常、山の教科書は文章(テキスト)主体になりがちですが、本書では名だたる山岳写真家による美しい写真はもちろん、細かいカットにいたるまで、それぞれの項目がイメージしやすいように、写真が豊富に使われています。手にとった方は一読して「これはわかりやすい」と思うことでしょう。

「登山の『教科書』だったらこれは書かないな」といった、著者の個人的なテクニクも収録。堅苦しい教科書ではなく、私的な塾の参考書といったイメージでご覧になってみてください。

また著者のトークイベントが池袋、神田、大阪・梅田で開催されます。興味のある方はぜひ足をお運びください。

■5月29日(火)19:30～

会場:ジュンク堂池袋本店 4階喫茶コーナー

要予約。詳細は下記URLにて

https://honto.jp/store/news/detail_041000025305.html?shgcd=HB300

■6月11日(月)18:30～

会場:ici club 神田 6階 EARTH PLAZA

要予約。詳細は下記URLにて

http://www.ici-sports.com/climbing_school/

■6月16日(土)14:00～

会場:MARUZEN&ジュンク堂書店梅田店 7F Salon de 7

要予約。詳細は下記URLにて

https://honto.jp/store/news/detail_041000025745.html?shgcd=HB300

『萩原編集長の山塾』

<https://www.yamakei.co.jp/products/2818150330.html>



『富士山ブック 2018』

富士登山のバイブル、最新版



『富士山ブック 2018』／5月14日発売／926円＋税／114ページ／ISBN=978-4-635-92476-4

富士山の最新情報とともに、登山初心者、未経験者にも役立つとして毎年好評の『富士山ブック』。

巻頭は小岩井大輔さんの荘厳なグラフで始まり、次いでアニメソング界のアニキコと水木一郎さんを中心としたアニメソング歌手とスタッフからなる「アニソン登山部」による富士山登頂ルポ。もちろん富士登山のための「4大コース徹底ガイド」「登り方基本講座」さらに「山麓観光案内」など、富士山に「安全に、楽しく、確実に」登頂するために必要な情報を満載。

さらに購入者特典としてデジタル版「富士登山便利帳 2018」があります。本誌をご購入いただいた方に特典として読者全員にプレゼントするもので、4大登頂ルートの詳細マップ、鉄道・バスのアクセス情報、マイカー規制情報、山小屋・宿泊施設情報と、富士登山を目指す人は絶対もっておきたいコンテンツです(6月11日からダウンロード可能)。

『富士山ブック 2018』

<https://www.yamakei.co.jp/products/2818924750.html>

残雪の屏風岳と後烏帽子岳(右)(写真=福井美津江)



週刊ヤマケイ

登山地情報

丹沢・塔ノ岳

ミツバツツジとゴヨウツツジが咲き競う



塔ノ岳の山腹に咲くミツバツツジ(写真＝小瀬村 茂)



多くの花をつけたゴヨウツツジの古木(写真=小瀬村 茂)

5月19日、曇り時々晴れ

今年は暖かい気候が続いたのでどこの山も全般的に花の開花が早く、また、丹沢のツツジは例年になく花付きのよい当たり年です。前夜は雨が降り、朝方には天候が回復したため塔ノ岳山頂部に咲くツツジを見にいきました。

登山途中はときおり青空が見えていたものの、山頂付近は濃い霧が山腹を覆っていました。土曜日の休日であったためツツジ目当てと思われる登山者が多く登っています。

大倉尾根上部の花立付近のミツバツツジはすでに花を散らし始めていました。しかし、塔ノ岳から丹沢山に向かう稜線上にはたくさんの花を付けたミツバツツジとゴヨウツツジ(シロヤシオ)が林の中で競いあうように咲いていました。特に塔ノ岳山頂の裏手から日高付近までは、登山道の両脇に樹齢を重ねたツツジの古木が群生しており、赤い花と白い花の華やかな咲きぶりに登山者は一様に歓声をあげていました。

(文＝小瀬村茂／山岳写真工房)

参考書籍

アルペンガイド『丹沢』

<https://www.yamakei.co.jp/products/2808013560.html>